

它山廟の稲花会について

松田吉郎

1938

筆者は二〇〇五年〜二〇〇九年の五カ年間、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―」（領域代表 東京大学小島毅先生）の「寧波地域の水利開発と環境」班の代表を勤め、寧波地域の水利研究を行っている。

寧波地域は唐代九世紀に王元暉が它山堰を建設してから、西部地域は従来の広徳湖に加え、它山堰が水利灌漑の主要施設となり、東部地域は従来からの東錢湖が水利灌漑を担った。しかし、政和七年（一一一七）樓昇が広徳湖を湖田化し、その八〇〇頃の水田の租を高麗使節の接待費とすることにより、寧波地域の水利は它山堰と東錢湖水利に限定され、寧波西部地域の主要水利施設は它山堰となった。

この它山堰を建設した王元暉に対しては寧波の人々の信奉は厚く、旧曆三月三日、六月六日、一〇月一〇日の年三回廟会が行われてきた。その中でも最大のもは六月六日の稲花会であった。

この稲花会は一九四五年に開催されてから長らく実施されず、二〇〇九年十一月二六日（木）に六四年ぶりに復活することになった。筆者は它山堰文物保護管理事務所の陳思光氏より教えて戴き、稲花会を見学することが

できた。

本稿は陳思光氏の稻花会研究の成果と二〇〇九年十一月二六日の稻花会の様子を参考にまとめたものである。

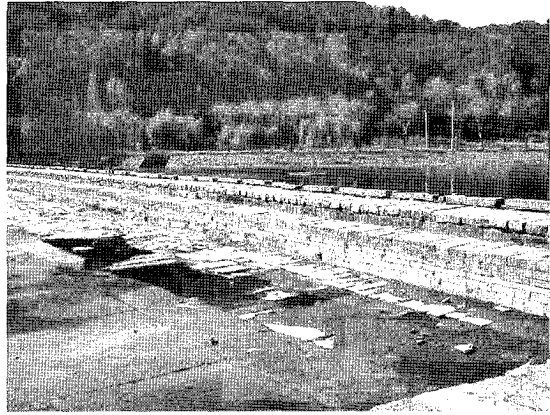
I 『鄞江橋』（陳思光）に見える稻花会

陳思光氏は一九四八年生で現在六〇歳、二〇〇九年十一月まで它山堰文物保護管理所所長を勤めていた。この它山堰文物保護管理所は它山堰を創建した王元暉を祭る它山廟境内にある。陳思光氏は『歴史名鎮 鄞江橋 地方古掌 参考資料』（出版年は不明）を著しているが、筆者は二〇〇六年に陳思光氏より同書を戴いた。同書の編後記によると、陳思光氏は老人の口碑伝説と関係者から収集した資料によって同書を作成したと述べている。

同書所収の陳思光著「鄞江鎮的歴史沿革和變遷」によると鄞江鎮は古代、鄞江鎮の中心地であった。

東晋隆安四年（四〇〇）に劉裕が句章（現在の鄞江鎮）に駐屯し、隆安五年（四〇一）に句章の地に県城を遷すことを決定した。隋代鄞県・鄞県・餘姚の三県を句章とし、県治は繼續して小溪鎮（現在の鄞江鎮）に置かれた。唐開元二六年（七三八）に明州が置かれたが、州治・県治はともに小溪に置かれ、小溪は州の大鎮であった。大曆六年（七七二）に鄞県治を寧波三江口（現在の寧波の中心地）に移したが、州治は小溪のままであった。長慶元年（八二一）鄞県治は小溪に戻り、州治は寧波三江口に移った。以後、小溪鎮は光溪鎮と呼ばれるようになった。

そして、唐太和七年（八三三）、鄞県令王元暉が光溪鎮（現在の鄞江鎮）に它山堰を設置し、光溪鎮並び寧波西部の農村部、三江口の都市部に水を供給した。こうして寧波西部と三江口地域の水利が整ったことにより、五代初期九〇九年に県治も三江口に移り、光溪鎮（鄞江鎮）は寧波の政治的中心地から退いた。



(它山堰 2005年12月撮影)

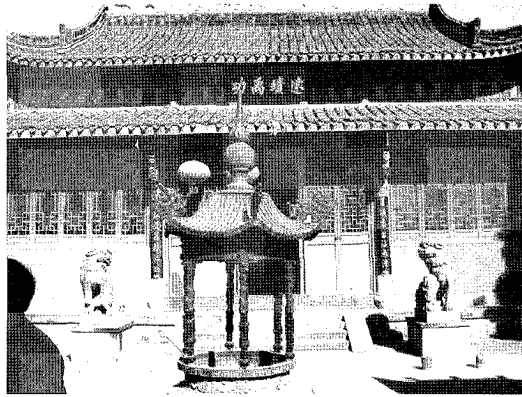
しかし、鄞江鎮の人々を含め、寧波の人々は王元暉を崇拜し続けた。
『乾道四明図経』（南宋乾道五年（一一六九）、張津纂集）巻二によ
ると、次のように記されている。

它山堰善政侯廟在縣西南四十里、以廟碑考之、蓋唐太和（八二
七〜八三五）邑宰琅琊王侯諱元暉之祠也、先是厥土連江、厥田宜
稻、每風濤作沴、或水旱成災、侯乃命採石於山、爲堤爲防、迴流
於川、以灌以溉、通乎潤下之澤、建乎不拔之基、能於歲時大獲民
利、自它山堰溉良田 者凡數千頃、故鄉民德之、立祠以祀、後
封爲善政侯、皇朝乾道四年（一一六八）七月八日有旨、賜遺德廟
額、知縣事揚布書、太守直閣張公津之所立也

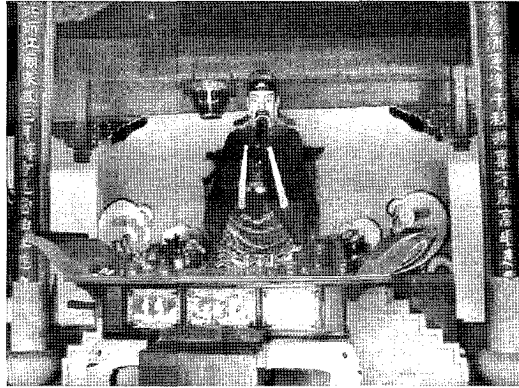
（八二七〜八三五）鄞県令の王元暉を祭った祠堂である。它山堰が築かれたことにより数千頃（一頃は五・六ha）から西南四〇里（約二〇km）の所にある。廟碑によると、唐太和年間
が灌漑できるようになり、郷民が王元暉の業績を徳とし、祠堂（廟）を建て祭祀した。後に王元暉は善政侯に封
ぜられ、南宋乾道四年（一一六八）七月八日に朝廷からの詔により遺徳廟の額を戴いた。同廟は善政侯廟と言わ
れたり、它山遺徳廟と言われ、俗に它山廟と言われ、人々に崇拜されている。

南宋淳祐九年（一一八二）に王元暉は靈徳侯に封ぜられ、清嘉慶一〇年（一八〇五）に孚恵侯が加封された。
道光二年（一八四二）に它山廟は重修された。⁽¹⁾

它山廟の廟会は旧暦の三月三日、六月六日、一〇月一〇日の三回ある。六月六日は稲花会と呼ばれ、最大のものである。一〇月一〇日は王元暉の誕生日であり、它山堰の建設日でもあったので祝われている。



(它山廟 2005年12月撮影)



(它山廟内の王元暉像 2005年12月撮影)

さて、この旧暦六月六日の稲花会については『鄞江橋』（陳思光）鄞江橋的風情習俗、稲花会に記されている。以下、その内容を見てみよう。

“六月六”稲花会は鄞江橋諸多の行会の中で規模が最大、範囲も最大の民間行会である。唐宋二代は掏沙会と称し、明清以後は太平会と称した。

稲花会はその名の示すとおり、稲谷開花時の農閑期の節句である。

唐太和年間に它山堰が建設される前、光溪及び北溪古港一帯は、洪水の衝撃により常に砂石で淤塞した。二岐の水は樟溪より平水潭をへて鄞江に直下し、淡水は蓄積出来にくかった。鄞西の梅園・蟹蛟・鳳巖・古林等の地の郷民は淡水を用い難いという苦労があった。六月六日前後の農閑期、民衆は自発的に組織し、土箕、扁担、沙耙などの掏沙道具を携帯し、鄞江橋光溪と北溪港の二地で掏沙し、河道を疎通し、引水して洗淨灌漑した。付近の市販商賈もまた紛々と鄞江橋にあつまり商業を営んだ。しばらくして鄞江橋独特の会市となり、俗に掏沙会と称した。

它山堰は建設後、鄞西七郷の農耕・飲料水の水源となり、郷民は鄞江橋に来て掏沙する必要がなくなったが、人々は六月六日の掏沙会を記憶していた。毎年、鄞江橋に集まる日は遂に三月三日、一〇月一〇日以外に別の廟会、即ち、俗称、稲花会となった。

“稲花会”は“太平会”とも称した。

社会的理由によるのであるが、当時毎年の夏季の到来によって、各種各様の伝染病、疫病が発生した。同時に封建社会の旧思想意識から当坊の習俗では香を焚き沐浴し、上蒼（上天）に告げた。香灰を食し、浄水を飲み、神霊の庇護を求め、太平を祈禱した。続いて它山遺徳廟王元暉公の神像に出駕して各方面への巡視を求め、平安を求め、豊作を願った。

唐宋以来、既に掏沙会があった。

南宋初期、高宗趙構が都を杭州に定め、浙東地区の経済文化もまた繁栄した。

稲花会は先に民社が自発的に行会を組織し、後に徐々に廟が組織する整った廟会隊伍に変わった。清軍が入関し、康熙年間、清皇朝、応天順民のために廟会を発展させた。明清両代の“六月六日”廟会の盛況は以下のよう

である。

「六月六日」稲花会の会期は三日間で、即ち初五日から初七日まで、郵江橋它山廟界下には合計四大堡、十二小堡あり、その下に十五個の自然村があった。各村坊に一人の柱首を設け、柱首は各村・各堡より先賢達人を選んで充当し、廟会を主担し、廟会下の一切の事宜を差配した。

廟会の下に十会一社を設け、柱と称した。議事を柱と称し、行会を会と称し、十会一社を一緒にして一支行会の隊伍を作った。

十会一社及びその主司の職責は以下の通りである。

伏頭会：廟神王令公（王元暉）の帽子を専管した。

揺鈴会：廟神王令公の袍服を専管した。

火符会：王令公出殿時の照明器具を専管した。

鬘駕会：神轎前の二十四件の儀仗鬘駕^③を専管した。

揺堂会：王令公神轎の昇降を専管した。

九如会：廟会の演戯を専管した。

河台会：官池河で船を雇って行う河台戯の上演を専管した。

供会：上供、爵献、祭祀を専管した。

炮担会：神轎出殿時の全ての火炮器具を専管した。

善慶龍会：老龍の護駕を専管した。

銃爆社：三眼銅銃で驅邪助威を専管した。

この十会一社は銃爆社が句章郷懸慈村によって組織されるのを除き、その他の十会は它山廟界下の弟子が組織したものである。

廟会は六月五日に開始し、它山堰により利益を受け它山遺徳廟より恩恵を受けている段塘の郷民が自発的に百官船三隻を組織した。六月四日、河台会より通知し、船を操縦して鄞江橋官池河に到着し、五日に官池河中において河台戯の上演を開始した。戯劇の種類多くは徽板戯であり、《鴻善劇団》と名付けられた。また戯子の多くは老演員であり、価鈿（出演料・衣装代）は比較的安かった。中には演員に扮した者がおり、演唱時命がけで頭を揺らして発声し、鄞江橋の人がいう老話の『老大鴻善徽板、落落動生三』であった。

六月五日午前、廟会の総首柱台は十会一社の各柱首を集め它山廟で議事させ、『六月六』の廟神の出殿行会の順序、人数等を按排し、各々その職責を担当した。

六月五日

午の刻（午前十二時）：王令公の神像前で香を焚き上供する。

未の刻（午後二時）：遺徳廟の廟祝が身を清め沐浴する。

申の刻（午後四時）：菩薩の身を清め、胡麻油で顔を塗る。

酉の刻（午後六時）：揺鈴会が神袍を奉り菩薩は新袍に衣替えする。

戌の刻（午後八時）：祈祷の儀仗程は当坊の名宦・仕紳・長者が跪き祭祀する。

亥の刻（午後一〇時）：四方の郷民が各々参拝し祭祀する。

六月六日

子の刻（午後十二時）：炮担会が登場し炮（爆竹）を鳴らし、菩薩・王令公を轎に乗せ出発する。時刻になり

廟祝が菩薩に背を向けて出殿し、神が轎内に入り、伏頭会は神に帽子をお供えする。神の帽子の二つの撫耳（耳飾）を黄金で作り、神の帽子の最後部を上にして、不測の事態を防いだ。神轎の前には撫板一枚をおき、参湯一盞・糕点二色をお供えした。白折扇一巴をもって、王令公の右手に挿し、白手拍一個を王令公の右手に置いた。一切の準備が整い、殿内外で炮声がおこり、郵溪村周家善慶龍会尚化山老龍が急いで駕籠を守って来た。

丑の刻から寅の刻（午前二時〜四時）、行会隊伍は始動・出発する。

六月六日 稻花会行会隊伍、行会ルート及び各供地点の概略は以下の通りである。

六月六稲花会後会隊伍の次序。

令箭が一人おり、行会隊伍の先頭において、次の供点に神轎を迎えるように通知し、お供えを奉り祭祀する、後には報馬と呼ばれた。

銃爆社の三〜四人は三眼の銅銃を撃ち、沿道の邪気を払い景気を添えた。

炮担会はその後ろに随従し、炮（爆竹）・杖（ステッキ）・登地炮を持ち、隊伍の両側に沿い壮威を添えた。

吹号（ラッパ）二人・嗷哨（チャルメラ）数人が音を鳴らした。

舞獅（獅子舞）一対、彩球（紅緑の絹布で作った球形の飾り、クス球）一個。これは清代康熙雍正年間に盛んに行われたが、乾隆年間にいたって中断した。

火籃（火の入った籠）四杯をもった会隊が先導した。また別に松油（タイマツ）の柴片（小さい形に割りさいた竹・木）を肩に担いで火籃に燃料を添加する。

旗鑼（旗や銅鑼）二面。郷民四人が旗鑼を肩に担ぎ王令公のために銅鑼を鳴らし道を開いて先導する。

大紅孛齋（大きな紅色のくろぐわい：赤提灯）四個に蠟燭を点灯し、王令公のために照明する。提灯には『鄺

縣、正堂、肅清、回避”文字が書かれている。

硬脚牌（札）四個、白地に“鄧縣、正堂、肅清、回避”の赤字が記されている。

皂隸（召使）四人、手に水火棍をもち、俗に紅黒帽・烏黒帽と呼ばれた。

鸞駕神轎（王元暉の塑像を載せた神輿）が中央にあって、郷民八人が輪流で神轎を肩で担ぎ、神轎の両側は二四個の全副鸞駕（鈴の飾り）で飾られている。王令公は神轎の中に坐り、右手に扇をもち、左手に帕（頭巾）を握り、満面紅色に光り、容姿が生き生きとしている。神轎の両旁には彩旗がはためき、爆竹の音が鳴り止まない。郷民百姓が争って神轎を担ごうとし、鸞駕神轎は全行会隊伍の中心である。

神轎の後ろにびったりと従っているのは搖堂会一人であり、“喝達郎”と呼ばれた。

神轎の後ろには皂隸四人がつづき、孝齋（赤提灯）四個を点灯して持っていた。

善慶龍会は尚化山老龍神轎（龍図の描かれた神輿）の後ろを保護した。元々老龍を保護することを九節といい、民国初期に十二節といわれるようになった。

殿後犯人の二〇人前後は廟界弟子の懺悔、願掛け、贖罪などを表した。身体に紅背心を着て、銅細穿細の大架（大杵）・脚鐐（足枷）・手铐（手錠）を懸け、罪人の誠心を示した。

最後尾に郷民の弟子が各種各様、色とりどりの提灯を持ってついできた。

これ以外に各郷・各村の客串（しろうと役者）・百姓が銃炮・彩灯・彩旗をもって補助し、並々ならぬ熱情を示した。

行会の隊伍は六月五日夜に準備を滞りなく行い、六日五更三点寅時（午前四時）に出発し、四坊の百姓は争って熱烈に見て、道を塞いだ。銃炮がパレードの先頭で芸を行い、火箭（火矢）が前方に飛ばされ、四グループの

青年壯年郷民が上半身裸になり火箭を持って乱舞し、百姓を蹴散らして道をあけさせ、行会隊伍が順調に通過できるようにした。

令箭⁽⁵⁾が松明のように届き、郎官弟⁽⁶⁾・九如会が頭供（最初のお供えの用意）をなした。

行会隊伍は潮のような勢いであり、郎官弟・九如会の戯班は銅鑼を鳴らし、場を盛り上げ、神轎の到着を待った。搖堂会・喝達郎は「善政侯孚恵王の王公が堂に立ち止まった」と叫ぶ。すると各皂隸・硬脚牌手・灯手等は「よし」と叫ぶ。神轎が戯台の前で止まり、松里の郷民弟子はすぐに浄茶・臉水（洗面水）・花色糕点（餅菓子）四色・季節の果物二色を用意し、八仙卓に載せ、紅色の良質絹布で蓋い、王令公に差し出した。郷民弟子は祭祀し、犯人は跪いて謝罪した。王令公は祭祀を受け演劇をご覧になり、一本の線香が燃え尽きる時間で祭祀は終わる。炮担会が爆竹を鳴らし、搖堂会・喝達郎がよしと唱え、「善政侯孚恵王の王公が堂を出られる」と唱える。多くの皂隸・硬脚牌手・灯手が「よし」と呼号する。その声は雷のようであり、衙役が堂で威圧するような声であった。郷民弟子がお供えを撤収した。令箭が先行し、次のお供えの龍王堂に報告した。

龍王堂の朱・王二姓は大興巷下頭南端、元鄞江衛生院旁の小溪港橋下段にいる。

官池河の河台戯は宵通して翌朝まで行われ、老太鴻善徽板は銅鑼を叩いた。神轎が街路を抜け官池塘まで来て、河台戯も神轎に従って龍王堂前に移り、官塘河兩岸は大騒ぎになり、郷民は狂ったように叫び、ここを大供の地点とした。その供祭の方式は「郎官弟」がお供えとお祭りをした。以下は行会のルートと順序である（『民国鄞県通志』所収の地図を参照されたい）。

定山橋：小供

界牌下（界牌下、現在は下呂家村）：大供、戯劇が催された。

百勝廟：小供

百梁橋：社田里鮑家塢を過ぎ、供点はない。

懸慈廟：小供

大德里・崗山嶺・問水亭を過ぎた所。

晴江岸：小供

邵家：小供

烏頭門を過ぎる。

周家：大供、戯劇がある。

鍾家：通過。

毛家：小供。

光溪村鍾祠：小供。

大栲樹下：大供。九如会の演戯がある。現在は鄞江鎮政府の前。

行会隊伍が通過する路線には合計十二箇所の供点があり、その中に、大供が五箇所あり、最大の供点は光溪村大栲樹下である。各村各堡の経済的实力により多い時には廟会戯が五台あったこともある。

稻花会行会隊伍は午後五時頃に光溪村上河頭大栲樹下に到着し、当坊の弟子によって王令公の神轎にお供えと祭祀がなされるこの時間が最も長かった。行会隊伍には晚餐が供された。二更（午後九時〜十一時）頃、王令公は殿（它山廟）に帰り、行会は終了し、近隣郷村の客串・炮会・灯会も帰った。

稻花会の行会ルートは鄞江、洞橋、寧峰、句章の四郷鎮、全行程四〇華里（約二〇km）である。

六月七日、官池河鴻善戲班子は它山廟内に遷り、安神戲を演じる。

“六月六”稲花会の行会全過程で非常に熱烈壯觀な神轎を争って担ぐこの祭祀は江南数省でも屈指のものである。

行会の隊伍・神轎が通過する所では、各村各堡は先に石灰で白線の標識をつけた。神轎がまだ境内に到着しない時、各村・各堡・各族は各々一〇名の精壯者を派遣して境内の神轎を担ぎ、決して先方の弟子には境内に越境させない。もし雷池（境界）を一步でも越境すれば犯衆（違反者）となる。各地の郷紳、各村の族長は青年・若者に時間を早めるように命じ、速く急いで神轎を担ぎ運び入れ、できるだけ神轎を境界内に長く留めれば当坊の平安が保たれると考えられた。

廟会行会の規定は、一地点の供点が終われば次の供点の境界で神轎をお迎える。しかし、各村各族は神轎をできるだけ長い時間境界内に留めおきたいために相互に神轎の奪い合いが起り、さらに神轎を担がない青年がその間に紛れ込んで、神轎を担いだ。僧侶が多く粥は少ない（物が少ないのに分配を願う人は多い）の喩えの通り、多くのものは神轎を担げず、手で神轎・担ぎ棒に触れるだけでも、来年の幸運が得られると思っている。神轎が第一供点から第二供点にいたる境界線上では、現今の綱引競技のように引っ張り合い、神轎の進退は潮の満干のようであった。三步進めば十歩退き、十歩進めば三步退いた。神轎の前進は困難で、郷民同士の争いは激烈で、喧嘩となり、お互いに殴りあった。お互いに押し合いをするので泥溝や田畝に落ちる者もあり、官府が出勤して調停と制御を加えることがあった。この空前の景況は它山廟境界内の弟子百姓が王県令を敬い尊敬する心を持っていることを示している。

“六月六”稲花会を総観すると、神轎の出殿、界内巡視が廟会の中心であるが、その市集街の盛況は決して”

三月三” “十月十”の二大廟会には及ばない。これは稲花会の時季が灼熱の天候であったからである。当時最もよい防暑薬品は薄荷（ハッカ）であり、最もよい防暑食品は木蓮であり、木蓮の栽培方法は簡単であった。衛生条件の差により、全廟会期間中、腹下しする人が無数であり、平安を保とうとして却って平安ではなくなったとも言われている。

Ⅱ 二〇〇九年十一月二十五日の開幕式・它山文化研討会、十一月二十六日の稲花会

筆者は二〇〇九年八月に它山堰文物管理事務所で陳思光氏にお会した際に、今年二〇〇九年十一月二十六日に六年ぶりには稲花会が開かれ、これは王元暉を祭る最大祭祀であるので、陳氏からは是非来なさいとお招きを受けた。

筆者は十一月二四日（火）に関西空港から飛行機で上海浦東空港に到着し、その後バスで移動し寧波大学に到着した。同大学外語学院楊建華先生より陳思光氏が明日の鄞江“十月十”廟会暨它山文化节（稲花会）開幕式に出るように言われていると伝え聞き、二五日に開幕式に出ることにした。

十一月二五日（水）、筆者は寧波大学外語学院日本語学科三年生の張林燕さんと一緒に参加し、張林燕さんに通訳して頂いた。

鄞江“十月十”廟会暨它山文化节は旧暦の六月六日節と一〇月一〇日節の合同廟会であり、筆者はその開幕式に参加した。陳思光先生（元它山堰管理事務所所長）、周時奮先生、繆復元先生（鄞州区水利局）、謝国旗先生（寧波市鄞州区文物管理委員会副主任）にお会いした。

開幕式終了後、廟会を見た。廟会には寧波地元を生産物、手工業品が実演・販売されていた。その後、近くの宏陽大酒店で、陳思光先生、陳勤建設先生（華東師範大学）、陳華文先生（浙江師範大学）、趙江濱先生（寧波大



(2009年11月25日 鄞江“十月十”廟暨它山文化節(稻花會)開幕式)

学)、毛海螢先生(寧波大学)等と会食した。

午後二時〜五時まで宏陽大酒店六階會議室で它山文化研討会が行われた。議題と発言者の要約は以下の通りである。しかし、繆復元氏と陳思光氏は寧波語で発言されたために通訳の張林燕さんが聞き取れず、発言内容は詳細に記せなかった。

議題

1. 領導、嘉賓が着席。
 2. 主持人周時奮先生が領導、嘉賓を紹介した。
 3. 鄞江鎮党委員会書記毛孟軍さんが祝辞と它山文化の基本状況を述べた。
- ① 工作舉措・成立・中心、② 戲劇文化芸術節、③ 博物館の建設(石博

物館・民俗博物館)。④王元暉の歴史的文献、廟会について説明した。

4. 専門家の主題発言と討論

① 王元暉の歴史的的位置と貢献

② 伝統廟会文化の伝承と発展

(1) 顧希佳先生が伝統的廟会の現代的意義—浙江省を例として—を報告した。

廟会は文化的象徴であり、一地方を具体的に見る事が出来るものであり、郷族文化の代表である。菩薩を中心として遺徳教化する。張襄公。菩薩の延長である。文化芸術、展覽会、演戲、演奏、人民の放松(パフォー

マンス)であり、生きた芸術である。そして物資交流でもある。問題は完全復活するかどうか、乱造とならないかどうか、心から新しい要素を入れようとしているかどうかである。研究方向は文献、民間の口述、実物の三方面から着手しなければならない。郵江它山、郵江文化は作為的ではなく、乱造してもいけない。

(2) 繆復元先生は它山堰の地位がなぜ高いのか、三七分流について説明した。

(3) 王さんは它山廟会の由来、即ち、三月三日、六月六日、一〇月一〇日を説明した。

六月六日の稲花会は民国時期に取り消された。考試? Sun er diu Xiu yu jiang

一九五〇、六〇年代には迷信とされ廟会は取り消され、物資交流会(山・海物資大交流)となった。

王元暉を記念する祭祀(祖先の偉大さを記念する節日)の中では10月10日が最も盛大である。廟会では五穀の豊穰を報告する。菩薩の出生は人と神の溝通(三月三日、神に五穀豊穰を祈祷する)であり、老百姓が熱烈に参加している。

農耕文化・時間節湊・三個の節句は明清時期、特に清代康熙・嘉慶時期に興盛した。文化の中心であり、廟会の歴史でもある。民国一〇年(一九二二)、一九三八年、一九四三年、一九四五年には西洋文化は駄目とされ、伝統的文化しか廟会に入らなかった。しかし、一九四六年以降二〇〇九年まで、どうして六月六日の稲花会が取り消されたのか不明である。

(4) 尚彦軍(中国科学院地質与地球物理研究所研究員)

地質の角度からの発言であった。

它山の文化は、以前は精髓であったが、現在は低調である。它山堰は、堰体向上傾斜であり、紅色盆地にある。河母渡:富加山・它山堰↓どうして加高したか↓黍積数率などの専門的な話をされた。数字化、信速化の

